2026年3月29日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

ヨルダン
小谷光子さん(49)
岡山県和気町出身

気持ちで相手を理解

ヨルダンで唯一海に面した観光の街アカバ。海の青と山の茶色のコントラストが美しく、夏は気温が46度まで上がる。公用語はアラビア語であり、私が2023年1月から2年間活動したアカバ特別支援教育総合センターも同様だった。

同僚は、私の拙いアラビア語をよく理解してくれた。だが、なぜか同僚以外には通じない場面も。「ああ、そうか」。同僚は日頃から私が話す意図や思いをくみ取ってくれていたのだ。私が障害児、障害者支援の職種で活動できたのはこの同僚のおかげだ。

職業訓練クラスに発音が不明瞭な生徒がいた。彼は元気で明るく、いつも何かを話しかけてくる。やりたい時は全力の身ぶりで「イエス」。納得できなければそばで訴え続ける。絵カードでコミュニケーションを図ろうとするが、使う間もなく始まる会話。結局「これがしたい?」「おなかすいた?」などと推測し、正解にたどり着いていた。

ある日、彼の行動が原因で生徒同士で問題が起きた。彼に注意をした後、支援方法をめぐり、私は同僚たちと少し言い合いになった。しばらくして彼が私に何かを尋ねてきた。いろいろと話してみたものの、彼は首を横に振るばかり。彼が何を言っているのか分からず困ってしまった。

同僚に助けを求め、同僚がありったけの言葉を投げかけたその時、同僚が大きくうなずいた言葉があった。「キーフェック?」。アラビア語で「調子はどう?」の意味である。つまり彼は、私を心配して聞いていたのだ。思わず笑ってしまい、「元気だよ」と伝えると、彼は満面の笑みでうなずいてくれた。何かが通じ合えた瞬間だった。

どこであれ相手を理解するのは難しい。言葉が通じないならなおさらだ。逆に言葉が通じても、理解し合えないこともある。大事なのは伝えようとする気持ちと理解しようとする心。そして授業を終えた時、彼の言葉が分かるようになった。彼が「お昼は何を食べるの?」と聞き、私が「シャワルマかな」と言って笑い合った日のことを今でもはっきり覚えている。

他の隊員たちと一緒に日本のお祭りイベントを実施して記念撮影。左端が筆者